

# 生物多様性を中心とした 海洋環境の保全と持続可能な利用

環境事務次官 鎌形浩史

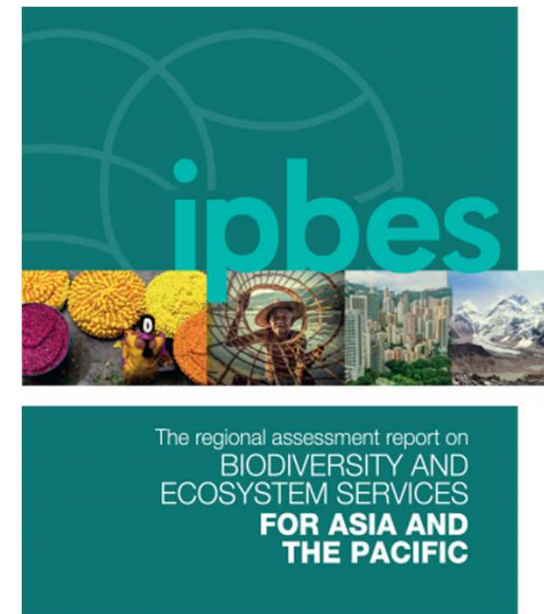
## IPBESによる海洋生物多様性の評価

### IPBES（生物多様性及び生態系サービスに関する政府間科学－政策プラットフォーム）

- 2012年に設立された独立した政府間組織。生物多様性のIPCCとも呼ばれる。
- 生物多様性や生態系サービスの現状や変化を科学的に評価し、政策提言を含む報告書を作成。
- 評価報告書ごとに公募で選出された世界レベルの自然科学者・社会科学者等が、既存の論文等の知見を集約

### 生物多様性と生態系サービスに関する地域評価：アジア・オセアニア地域（2018）

- 北東アジアでは陸地の保護区の割合は高い（17%）が、海洋の保護区の割合は5%未満。
- 持続不可能な水産養殖、乱獲と破壊的な漁法が、沿岸及び海洋生態系の脅威。持続不可能な漁業がこのまま続くと、2048年までに水産資源が枯渇する可能性あり。
- サンゴ礁は、気候変動に関する保守的なシナリオでも2050年までに90%が著しく劣化すると推定されている。
- 気候変動と異常気象等の地球環境の変化は、海域と陸域の生物多様性に重大な影響を与え、ひいては地域全体で生態系機能の崩壊と食料安全保障問題の悪化をもたらす可能性。



## 生物多様性と生態系サービスに関する地球規模評価（2019）

- 海洋生態系への相対的な影響要因として、生物の直接的採取が最も大きく、次に陸域／海域利用の変化が続く。
- 気候変動の影響も受けて、サンゴの死滅は加速している状況。

### 海洋に関する詳細

- サンゴ礁における生きているサンゴの被覆率は1970年代以降おおよそ半分に。気候変動が他の損失要因を増幅するため、この数十年、サンゴの死滅は加速。
- 海洋生態系への相対的な影響としては、生物の直接的搾取（主に漁業）が最も大きく、陸域／海域利用の変化が続く。
- 沿岸域から深海域にわたる海洋生態系に、人間活動の影響が生じている。沿岸域の海洋生態系では、過去に起こった広範囲にわたる、規模的そして質的な損失が、現在進行中の急速な損失とともに確認されている。
- 地球規模では、土地利用の変化が、陸域及び淡水生態系への最も大きな相対的影響にも付随する直接的要因。直接的な魚類や海産物の搾取は海洋に最大の相対的影響を与え続けている。
- プラスチックの微粒子及びナノ粒子は、食物網に入り込んでいるが、その経路については解明されていない部分が多い。



## 地球規模評価（2019）で示された主な数値データ

- 海洋プラスチック汚染は1980年以降10倍に。少なくとも267種に影響。
- サンゴ礁は2℃の気温上昇で1%未満の被覆率となると予測

## 海洋に関する詳細

- ◆ 沿岸域の生息地とサンゴ礁の喪失は、沿岸域の防護機能を低下させ、1/100年規模の沿岸洪水地帯に暮らす1億～3億の人々の生命や財産が、洪水やハリケーンにより失われるリスクを増大。
- ◆ 陸地面積の75%が著しく改変され、海域の66%が気候変動等の増大する影響下にあり、85%以上の湿地(面積)がすでに失われた。
- ◆ 2014年時点で、わずか3%の海域だけが、人類からの影響を受けることなく存在している。
- ◆ 海洋プラスチック汚染は、1980年以降10倍となり、ウミガメの86%、海鳥の44%、海棲ほ乳類の43%を含む少なくとも267種に影響。
- ◆ サンゴ礁はとりわけ気候変動に脆弱で、1.5℃の気温上昇では元の状態の10-30%の被覆率、2℃の気温上昇では1%未満の被覆率となると予測。
- ◆ 海草の面積は1970年から2000年にかけて、10年間に10%以上の速度で減少している。
- ◆ サンゴ礁における生きたサンゴによる被覆は、過去150年間にほぼ半分となった。海水温上昇と海洋酸性化が他の要因と相互作用し、更にこうした要因を増幅させるため、その減少はこれまでの20～30年に劇的に加速。